

互いに評価させ、応用言語学に関する基礎的な知識を身につけるだけでなく、基本的なプレゼンテーションのスキルを身につけることも目的としている。また、英語学演習では、応用言語学で興味のある分野のレビュー論文をペアで担当し、同様の形式での発表と相互評価を行っている。基礎演習と比べると、背景知識を補うため関連書籍などを調べたり、参加者からの質問を調べたりすることが求められる他、1回に1本のレビュー論文を読み進めていくことになるため、より高度な内容となっている。後期には個々の興味を持った分野のより発展的な知識を得るため、レビュー論文ではなく、具体的な研究事例を扱った論文を読ませていく予定である。

3. 管理運営活動

今年度は図書委員会と一般外国語科目運営委員会に所属しているが、前者においては、データベースの運用実態について把握し、効果的な運用方法を図書館側と考えていきたいと考えている。また、後者に関しては、英語のプレイスメントテストに関して、組織だった運営を行い、データの分析なども含めて、より効果的な運用を考えていきたい。

4. 社会的活動

ここ数年、ベネッセ・コーポレーションの「英語コミュニケーション能力テスト」の企画、開発に参加している。また、ベルリッツと共同した社会人向けのコンピュータ版英語コミュニケーション能力テストの開発にも協力している。その他にも、同じく、ベネッセ・コーポレーションの児童向け英語教材「BE-GO」の開発や、アルクから独立したコスモピアの、ウェブ上の英語学習サイトの開発にも協力しており、専門知識を用いてテストや教材開発に貢献している。専門知識の上では、去年に引き続き今年度も、ロータリー財団の国際親善奨学生英語面接官を務めたが、今後も継続して協力していきたい。

また、昨年からは、東京外国語大学の21世紀COEプログラムのTUFSS言語モジュールの開発にも参加し、17言語のウェブ上の学習教材の開発に協力したが、そこでは、主に、発音モジュールや会話モジュールの学習モデルの開発などを担当した。これだけの多言語によるe-learning教材の作成は例にない試みであるが、今後も語彙や文法モジュールの開発も控えており、継続的に協力をしていきたい。

この他にも、文部科学省向けに語彙診断プログラムを開発したり、東京外国語大学の高大連携プログラムの一環として、文法診断テストのプログラムを開発したり、プログラミング技術を活かした貢献も行っている。

杉山 晃

(スペイン語スペイン文学科教授)

1. 研究活動

大学院修了後、最初に書いた論文はメキシコの作家フアン・ルルフォについてのものであった。「フアン・ルルフォの短編小説における死と罪」と題されたこの論考は、「津田塾大学紀要」(第18号)に掲載された。その後も、ルルフォの作品を中心に研究を進め、親子の関係性についていくつかの論文を書いた。

ルルフォは荒涼とした風景のなかで、暴力や死や宿命をえがいた寡作な作家である。生涯に一冊ずつ長編小説と短編集をのこした。それらの作品を教室で講読の教材として使ってきたが、翻訳も同時に進め、『ペドロ・パラモ』は岩波書店、『燃える平原』は水声社からそれぞれ刊行された。

ルルフォがひと区切りついたところで、ペルーの小説家ホセ・マリア・アルゲダスの研究にとり組んだ。アルゲダスは、白人系だったが、子どものころ、アンデスの先住民であるインディオたちにまじって育った。そのため、インディオの文化と西洋の文化のあいだで宙づりになって苦しんだ。彼の自伝的な作品には、その体験と苦悩が表白されているとともに、先住民の感性や精神世界がみごとにえがきだされている。

この十数年はそうしたアルゲダスの研究にとり組んできた。とりわけ『深い川』にひそむ死への憧憬について、あるいは『ヤワル・フィエスタ』におけるアンデスと西洋の対峙について、いくつかの論文にまとめた。また、これらふたつの長編も翻訳した(現代企画室)。現在では、アルゲダスのすべての短編を訳しており、その半数は先だって刊行されたところだ(彩流社)。

2. 教育活動

私が担当しているおもな科目は、一、二年生の「スペイン語演習（講読）」と、三、四年生が受講する「スペイン文学演習」、および「ラテンアメリカ文学史」である。一年生の講読では、文法の進み具合を横目で見ながら、読み切りの短い文章を読むことにしている。そして二年生の講読では、やさしい短編小説をえらんで数回でひとつの作品を読み終える。授業の目標はいずれも、書かれた文章を正確に読み解く能力を身につけることである。授業では、その訓練をおこなっていくが、読んで訳すだけという無味乾燥なものにならないようにつとめている。

その工夫のひとつとして、たとえば、文学演習の授業では、下調べしてきたものを、まず数人でたがいに教え合いながら点検し、問題点を洗いだす。そのあと、グループの代表が、文法や作品の内容についての疑問点を発表し、全員でそれらについて検討をくわえる。この方法だと、受講生たちは、下調べやグループ討議を通じてテキストをくり返し読みこむだけでなく、積極的に授業に参加する状況が生まれる。そしてえてして単調になりやすい講読の授業は、さまざまな発言がとびかう、活気のある場になるのである。

とはいえ、ラテンアメリカ文学史のほうの授業では、この方法は使いづらい。文学史は一方通行の授業になりがちであるうえに、人名や書名がつきつぎに出てきて、それらの作品の内容を知らない者にとっては、退屈な時間とならざるを得ない。その退屈さをしのぐために、多くの補助教材を用意し、作家の顔写真を見せたり、じっさいの作品を回覧したり、その一部を読んだり、翻訳したりしている。とはいえ、大きな文学の流れの把握はともかく、個別的な作品のひとつひとつに分け入るのはむずかしいといわざるを得ない。

文学史の授業を通じて思うことは、新しいメディアを使えば、この授業にこそ大きな効果があげられるのではないかということである。多様な資料を映像や音声で提供できれば、受講生にとってより理解しやすく、親しみやすい授業になるのではないだろうか。じっさいにそうしたプレゼンテーションの教材をつくりはじめているが、準備に要する時間や、著作権、設備機器などの問題があり、ためらいを感じている。

3. 管理運営活動

この三年あまり図書館長の職にあるが、図書館でも

情報技術の急激な進展への対応が迫られている。図書館長は、図書委員会や紀要委員会の長もつとめ、インターネット時代に入って、年々ますます多忙で複雑な職務になってきている。外部データベースの出費がふくらむなかで、予算の削減やその配分などに全学的なコンセンサスを得るための努力も求められている。

紀要委員会でのここ数年の懸案は、掲載論文の本数が少ないことと、それらをインターネット上で公開することの是非である。紀要に活況のあった時代には、掲載本数は二十点あまりをかぞえたが、現在ではひとつの半ばあたりを上下している。学内の研究所が発行する論文集や、教員が所属する学会の機関誌といった多様な媒体があり、その選択のなかで、大学の紀要がしだいに顧みられなくなったといえる。

しかしながら、紀要論文が、そのままウェブページに掲載され、容易に検索される時代が訪れようとしている。またそのデータベース化の事業が国によって推進されており、近い将来、本学もそれに加わる見込みである。そうした状況の変化により、大学の紀要も魅力的な発表の場へと変化する可能性が大いにある。

いずれにせよ、そうした紀要の活性化とともに、図書館そのものが新しい時代に適応していかねばならず、ここ数年、他の大学や機関とのネットワーク化を模索してきた。それで、図書館利用規程を整備したうえで、品川区立図書館と協定を結び、2003年の4月より相互の蔵書がそれぞれの図書館で借り出せるようになった。

専門書の多い大学図書館と、一般図書の充実した区立図書館とは相補いあう関係にあり、メールカーにのって区立図書館の本が大学に届けられており、今後その利用はさらに多くなるであろうと予想される。いずれにせよ、ここ数年は、インターネット時代への対応や新しい図書館システムの導入、周辺の機関とのネットワーク化などに努力してきたが、知識の不足もあって図書館長という職責をやっとの思いで果たしてきたように感じている。

4. 社会的活動

スペイン語とラテンアメリカ文学を専門とする身として、社会においてもこのふたつの分野にまたがる仕事をささやかながらおこなってきた。スペイン語関連では、スペイン語ラジオ講座で何年か講師をつとめ、毎月のテキスト作りに大わらわであったが、その一部を大学の講読のテキストとして編集しなおしたのが、『リペイロ短篇集』と『探偵ペドロの優雅な午後』で

ある。それらはいまもさまざまな大学で使われている。私としては、それらの補助教材をつくり、インターネットで提供できるようなシステムを構築したい。すでにその具体化への第一歩をふみ出しており、予算措置もとられている。

またラテンアメリカ文学関係では、これまでさまざまな新聞や雑誌にラテンアメリカの作家や作品を紹介してきた。日本では八〇年代以降にボルヘスやマルケスなど、ラテンアメリカの小説が集中的に翻訳紹介され、私もしばしばそれらの作品について書評を依頼されてきた。そうした文章はこれまで二冊の本にまとめられている。『南のざわめき——ラテンアメリカ文学のロードワーク』と『ラテンアメリカ文学バザール』である（共に現代企画室）。今後はペルー文学の紹介にもうすこし貢献できればと願っている。

ホワン・ミゲール・ベナビデス (スペイン語スペイン文学科教授)

1. 研究活動

私の学位論文(1997年)は日本語の所謂「てにをは」とスペイン語の前置詞を類型論的見地から考察したものであるから、日本語とスペイン語の対照言語学が私の専門といえるのだが、もともと言語の習得それ自体が好きなので、つい脇道に逸れて、他の言語にハマってしまう傾向がある。昨年度は、寸暇を惜しんで、アラビア語の勉強をした。アラビア語は、幼い頃、ラジオから偶然流れてきたモロッコのラジオ放送で聞いた初めての外国語であり、若い頃に通りアラビア文字を覚え、文法にも目を通したことはあるのだが、9・11の事件後に公表されたテロリストたちの狂信的な遺書を読んで、ショックを受け、もう少しイスラム世界について知りたいと思ったのがアラビア語に取り憑かれた直接的理由である。

しかし、言うまでもないことであるが、アラビア語は私が教えているスペイン語と関係が深い言語である。7世紀から約800年におよぶ、イスラム教徒たちによるスペイン支配と共存は、スペインのあらゆる面に重大な影響を与えたが、スペイン語に残した足跡も

顕著である。スペインやスペイン語圏の国々の数千に及ぶ地名はアラビア語かアラビア語から派生したものであるし、現代スペイン人が毎日の生活に使うごくありふれた品物にもアラビア語が残っていて、アラビア語からの派生語はおよそ3000語にもなる。また、日常良く使われる表現やことわざ・格言の中には、アラビア語から訳されたものも多い。例えば、スペイン人がよく使う別れの挨拶“*hasta mañana si Dios quiere*”「明日会いましょう。もし神様が望まれるなら」は、アラブの挨拶の直訳である。フラメンコの歌にはよく「ライ、ライ、ライ、、、」というかけ声が使われているが、イスラム教の祈りのことば“*laa illah ila allah.*”（アラーの他に神は存在しない）に由来するに違いない。先日、イベリア半島北西部のガリシア地方の古い民謡を聞いていたら、同じかけ声が使われていた。南部のアンダルシア地方だけでなく、遠く北部まで、イスラムの影響は色濃く残っている。

こうした小さな発見は枚挙に暇がないほどあるが、アラビア語の学習は別に論文を書くためのものではなく、単にささやかな個人的な楽しみにすぎない。強いて何かの役に立つと言えば、授業での雑談のネタになるぐらいかもしれない。

アラビア語の合間に少しづつ学んでいるのが、日本語と同じ膠着語に属するモンゴル語である。シンタックスも形態も日本語に似ていて、興味深い。

私の外国語学習は常に独学であるが、現在では、専らパソコンを利用している。パソコンに様々な言語の文字と辞書を組み込んでおいて、教材は、インターネットを通じて新聞雑誌の記事、ラジオ、テレビ番組を使う。語学学習には実に便利な時代になった。このパソコンを使った学習法あるいは言語教育は私が学生に伝えたいことのひとつである。

昨年度3月に母校のグラナダ大学言語学部で開催されたアジア言語のシンポジウムに招かれ、私は日本語の統語構造についての講演を行い、言語教育についてのパネルディスカッションに参加した。集まった中国語、チベット語、モンゴル語、朝鮮語などのスペイン人研究者と話し合いの機会を持てたことは私には大いに刺激になった。また、参加したスペイン人学生の水準の高さと言語学習に対する熱意に感銘を受けた。グラナダ大学にはまだ日本語科がないが、日本語、日本の歴史、文学、漫画などに興味を持つ学生はかなりのようだ。彼等の多くは独学で日本語を学んでいる。そのうちのひとりの男子学生に私のいる清泉大学(Universidad Seisen)の日本語科にぜひ入学したいといわ

れ、慌てて、清泉大学は女子大学であることを伝えると、驚いていた。スペインには女子大学は存在しないからだ。

今回のシンポジウムでは多くの講演者がパソコンとプロジェクターを接続し大画面の映像を使って発表していたが、数年前には見られなかったことだ。言語学の分野にも、プレゼンテーションの時代がやってきたようだ。実際に、見事なプレゼンテーションで、専門外の人にも分かりやすく、興味を喚起し注意をひきつける発表があった一方で、内容が伴わないプレゼンテーション倒れのものもあったが、...

2. 教育活動

私の担当授業のうち3・4年生対象のものは、出来る限りパソコンの使用を勧めている。レポートや宿題は、原則として、添付ファイルにしてEメールで提出するようにしているが、昨年度は全員がまったく問題なくこなしていた。語学演習の授業では教材にテレビスペイン(TVE)のドラマのビデオを使っているが、今年度はCD-ROMにも収録して、各自自分のパソコン上で繰り返し音声を聞いたり台詞を読みメモを書き入れたりすることができるようにする。

また、ゼミでは、チームごとに、スペイン語やイスパニア文化に関するテーマを選んで、各自の得意分野のテクニックを駆使して、プレゼンテーションを完成させる実験をこの数年試みてきたが、年を追うごとに、良いものができるようになってきた。今年度も続けて行きたい。

3. 管理運営活動

管理運営活動についてだが、これは私が一番苦手とすることで、職責を果たすどころか、他の教員の方々の足を引っ張る結果になっていないかと危惧している。その原因のひとつはやはりことばの問題であろう。私のような日本語を第一言語としない外国人教員にとっては、毎回配布される山のようなコピーは恐怖以外のなにものでもない。字引きを引きながら全部に目を通すことは到底不可能である。余りにも多すぎて、取捨選択ができず、最も重要なものを見落としてしまうこともしばしばある。印刷物ではなく、ファイルにしてEメールで事前に配られれば、少なくとも私はパソコン内蔵の辞書を使って、より早く読むことが可能になる。また、議案によっては、Eメールでのやり取りで済むものも少なくないのではないか。更に、

会議で、必要な資料やデータをパソコンからプロジェクターを使って直接スクリーン上に提示すれば、無駄な印刷物を減らすことができるだろう。資源の無駄を省き、効率化を図るためにもイントラネットや情報機器をもっと利用することを提案したい。

4. 社会的活動

特記事項なし。

吉田 彩子

(スペイン語スペイン文学科教授)

1. 研究活動

コロンブスに始まる大航海事業により、日が沈むことのない帝国として君臨した16、

17世紀はスペイン史の中で黄金世紀と呼ばれている。それは新大陸の征服者たちの時代であると同時に、宮廷画家ベラスケスや『ドン・キホーテ』のセルバンテスを輩出した、スペイン・バロック芸術の黄金期でもあった。その黄金世紀の文学の研究、特にコルドバの詩人ルイス・デ・ゴンゴラの長編詩『孤独』の解説を中心に、スペイン文学の研究を続けてきた。研究の成果は、初期においては本学の『紀要』、日本イスパニヤ学会、アジア・イスパニスタ会議等において、近年はヨーロッパを中心に国際学会の場で発表してきた。過去24年間の論文総数は25点、口頭発表は13回。過去7年間に参加し、発表を行った学会と大学は以下の通り。第4回国際黄金世紀学会(96年・アルカラ・デ・エナーレス大学)、第3回アルゼンチン黄金世紀文学学会(97年・ブエノスアイレス大学)、第5回アルゼンチン・スペイン学会(98年・アルゼンチン・コルドバ大学)、第13回国際スペイン学会(98年・コンプルテンセ大学)、第5回国際黄金世紀学会(99年・ミュンスター大学)、カルデロン生誕400年記念国際会議(00年・ナバラ大学)、第14回国際スペイン学会(01年・ニューヨーク市立大学)、第6回国際黄金世紀学会(02年・ブルゴス大学)。00年・ナバラ大学までの発表論文は、すでにそれぞれの会議録論文集(acta

s) に採録、Editorial Castalia や Iberoamericana などから出版されている。

学術誌では、トゥールーズ大学刊行の名門誌『CRITICON』に、過去に2つの仕事が掲載された。94年11月の特別号1と、95年1月の特別号4においてである。

研究の副産物として、研究者である私と社会との架け橋になったのが、翻訳・著作の出版活動である。翻訳の仕事にあたっては、スペイン文学・文化の普及を旨とし、黄金世紀という枠組みにとらわれず、常に最良質の作品を厳選した。すべて本邦初訳である。1978年、19世紀スペイン文学の最高知性と評される、ファン・バレラ『ペピータ・ヒメネス』（主婦の友社）を上梓。83年には、グラナダ大学で師事し、バロック研究を学んだエミリオ・オロスコ教授の代表的な著書『ベラスケスとバロックの精神』（筑摩書房）を上梓。これは今なお日本語で読める数すくない本格的なベラスケス論として、美術史家の必読書となっている。86年から88年にかけて、世紀末から内戦に至る時代の国民的な作家、ラモン・デル・バリェ＝イン克蘭の4部作『春のソナタ』『夏のソナタ』『秋のソナタ』『冬のソナタ』（西和書林）を上梓。87年、『バロックの愉しみ』（共著・筑摩書房）に『無謀の生』と題した小論を寄せ、ゴンゴラの『孤独』発表をめぐる空前の文学論争の周辺を詳細に紹介、考察した。91年、ゴンゴラの文学的な宿敵である、フランシスコ・デ・ケベードの中編小説『地獄の夢』を澁澤龍彦文学館シリーズの第2巻『バロックの箱』（筑摩書房）に収めた。

一方で、豊富な滞西生活、研究旅行の経験と交遊を通じて知ることになった、フランコ以後の最先端の文学の翻訳や、若者文化の紹介も折りにふれ行ってきた。92年3月、『現代のスペイン』（共著・角川書店）に寄せた小論で、本邦初のまとまったアルモドバル紹介を行い、『オール・アバウト・マイ・マザー』で、世界的な巨匠の地位を確固たるものとした映画監督の初期の作品群を総括した。また、95年度のアソリン賞を受賞することになる、詩人ルイス・アントニオ・デ・ビリェナの小説家としての才能をいち早く評価し、92年、都市の青春群像を描いた『チコス』（共訳・筑摩書房）を上梓した。巻末に付した豊富な訳註により、日本と酷似した60年代、70年代のスペインの若者の風俗とカウンターカルチャーの実際を詳らかにし、独裁から共和制への移行期に、スペインに唐突にポスト・モダン現象が起きた経緯を初めて紹介した。97年、『地中海歴史散歩・スペイン』（共著・河出書房）では、留学時代から縁の深いグラナダの紹介を担当、イスラム支配からガルシア・ロルカに至る、古都の歴

史と特性をまとめた。

その他の出版活動としては、『大百科事典』（84年・平凡社）、『西和中辞典』（89年・小学館）、『世界文学辞典』（90年・新潮社）、『世界文学大辞典』（96年・集英社）などにおける執筆分担がある。

これまでの研究・出版活動の中で最大の業績は、94年度グラシアン基金および本学の95年度助成金を受けて上梓した『ルイス・デ・ゴンゴラ「孤独」翻訳・評釈』（99年・筑摩書房）である。2分冊からなる本書の第1巻は、2段組の上段に翻訳、下段にスペイン語の原文を配した。ジャム版（94年）に修正を加えて作成した原文テキストが現在、世界で最も信頼度が高いものであることもあり、00年9月、学術誌『CRITICON』78号に、『孤独』の翻訳冒頭3頁が、編集部の推薦文付きで転載された。第2巻は、17世紀の評釈者たちの手稿本から20世紀末に至る『孤独』をめぐる文献を渉猟し、徹底的に吟味した詳細な評釈となっている。『言語』（00年6月号・大修館）に掲載された、京都大学の篠原資明氏の評にもある通り、ゴンゴラはヨーロッパ文学において最重要の詩人のひとりであるが、いくつかの詩篇が断片的に紹介されただけで、まとまった翻訳は皆無であった。ペトルルキズモとゴンゴリズモ。名古屋大学の池田廉氏により『カンツォニエーレ』の全訳が日の目を見ることになったペトルルカと並び、その名を文学用語にとどめた、偉大な詩人の代表作である『孤独』の邦訳は長く待たれながらも、極度の難解さゆえに翻訳は不可能とされてきた。創意工夫をつくして不可能を可能にした本書は、国内のみならず、フランスやスペインの学会でも最高の評価を得ている。

ファン・バレラからルイス・デ・ゴンゴラに至る、長年のアンダルシア文芸の翻訳・紹介、並びに90年代の国際学会における抜群の研究業績が評価され、2001年11月8日、スペイン王立コルドバ学術芸術文学アカデミーの日本人会員に任命された。アジア出身の会員は同アカデミー初である。

2. 教育活動

大学が学生によって成り立つ以上、いうまでもなく教育は最も重視されなければならない。そして、教育と研究は二者択一の対立命題ではなく、永遠の補完関係にあると私は考えている。

とりわけ上級年次の専門科目においては研究者としての私の関心を学生に伝えるように心がけている。教師も学生と同様に学びつつある存在であり、自己のま

なびの姿勢を伝えることが「研究機関」でもある大学の教員の使命であろう。

「スペイン語文学講義」は私の黄金世紀研究が試される場である。この講義では長年、ゴンゴラの『孤独』を扱ってきた。17世紀の評釈から近年の研究動向まで、最高水準の研究成果を教室で語った。そんな難しいものを、学部生に、というのは間違いである。学生は私の悪戦苦闘ぶりを大いに楽しんでくれた。私は学生を面白がらせるために勉強した。私はゴンゴラの研究を学生とともに作り上げてきたことになる。近年では、通年授業のテーマを二分するかたちで、ゴンゴラとともにセルバンテスを扱い、黄金世紀の文学を韻文・散文の両面から考察することにしている。セルバンテスの部では『ドン・キホーテ』を、膨大な註をおろそかにすることなく丹念に読み、テキストの正確な理解をめざす。たとえば有名な「風車の冒険」。ラ・マンチャの風車は当時オランダをまねて建設された先端技術だった。だから風車を攻撃するというのはハイテク工場を壊していくようなもので……といった具合。

「スペイン語文学演習」はロマン主義を扱い、こちらもジャーナリストのララと詩人エスプロンセダという異なったジャンルの作家を組み合わせている。ロマン主義が自由主義・近代化と結びついた運動であったことを通じて、文学が政治や社会と深くかかわることを理解する。グループごとの発表、討論により、学生には「考える」契機となるようだ。たとえば、死刑囚をテーマにしたエスプロンセダの詩とララのコラムからは、現在の死刑制度について、その存続について。演習という形態上、研究と教育の間にある授業であり、また私の、個人としての生き方が問われる授業でもある。昨年度試験的におこなった学生の授業評価で、きわめて高い数値が出たことは印象的だった。

「スペイン文学史」(3・4年選択)「スペイン文化概論」(1年必修)では、なじみのない固有名詞と用語の氾濫に困惑する学生に、基礎的な知識を、満遍なく、しかし整理して与えることに力を注いでいる。「文化概論」はスペインとスペイン語にかかわる人の基礎教養であるので、スペイン文化の固有の性格と芸術様式についての理解をめざす。文化の固有性については、一回ごとのテーマを明確にすることで、昨年はかなり成功した。芸術様式の理解にはビデオを利用するが、よい映像の入手に苦労している。

初学年の語学教育(講読)は、私にとってきわめて重要な授業である。学年度のはじめには「受講ガイド」を配り、予習⇒授業⇒復習という流れを説明、いつ、何を、どれくらい勉強しなければならないかを明確に

示す。毎回の授業のはじめに小テストを実施、学生が習得度を自己確認できるようにしている。また、学年末には、いち早く授業内容についてのアンケートを実施し、学生に批判をしてもらい、改善に努力してきた。

ところで、語学教育においては、熱心に知識を与える(厳しい授業をする)ことが、かえって学生を遠ざけてしまうこともある。昨年まで、そのような状態に陥った2年生を集中的に受けもった。語学の勉強についていけないと感じた学生たちに、語学が「できない」ことは人間の値打ちを下げるものではないこと、しかしまた、語学は勉強すれば誰でもできるものであることを、ひたすら説き続け、励まし、決して怒らず、1年後に単位を取得させた経験は、教師としての喜びに満ちたものだった。

学生あつての教員である以上、休講はしない、というのが私のモットーである。学会等の公務でやむをえず穴をあけた授業については、必ず補講を行っている。ほぼ皆勤に近い出講率は、私の教育に対する姿勢を物語るものだと考える。

また本学の特色のひとつである「こころの教育」のささやかな試みとして、私は週2回、希望者の予約を調整し、学生たちとの昼食会を持つことにしている。

世界の第一線のスペイン文学研究者を招聘し、公開講座の連続講演会を開催するためのコーディネーターも私の教育活動における重要な仕事のひとつである。

96年秋には国際黄金世紀学会名誉会長であるトゥルーズ大学のマルク・ヴィッツ博士、翌97年には同元副会長、アルカラ・デ・エナーレス大学のマリア・クルス・ガルシア・デ・エンテリャ博士の招聘をコーディネーター。この二つの招聘経験をベースに、本学の誇る外国人教員の招聘制度が誕生した。

02年秋には黄金世紀演劇文学研究の最高権威であるマドリッド・コンプルテンセ大学のホセ・マリア・ディエス・ボルケ博士の招聘をコーディネーター。12回の連続講演会は学内のみならず学外からも高い評価を得た。

本場の最高レベルの講義を清泉のキャンパスで受講することができる外国人教員の招聘は、ともすれば目標を見失いがちな文学研究のモチベーションをたかめるうえで効果的であると共に、文化の違いに触れることで、より広い視野から学問や自己をとらえなおす契機にもなるものと考えている。

3. 管理運営活動

1988年度～1991年度、1998年度～1999年度、200

2年度～2003年度、計4期にわたり、スペイン語スペイン文学科主任をつとめる。

1993年の大学院修士課程設置に際しては、設置委員のひとりとして準備にたずさわった。

また最初の主任在職期間に、第3回アジア・イスタニスタ会議（1993年1月開催）を本学に誘致、準備委員会の中心メンバーとして、大会を成功させた。

以下、スペイン語スペイン文学科主任として気付いた、学科運営の問題をのべる。

本学科の運営の難しさのひとつは、教員数の不足につきる。学科の性質上、ネイティブ・スピーカーの専任教員は多いほど良い。しかし、学内の委員会のため的人员、進学相談会、父母懇談会には、日本人教員でなければ務まらないことも多い。主任業務も然り。スペイン語スペイン文学科の日本人教員は、一人当たり、他学科とは比べものにならないほどの学内業務をこなしている。いっぽうで、大学にはじめてまなぶ語学教育には、基本的に手間と時間がかかる。管理運営が評価されるのはまことに正しいが、それならば、学科特有の、このような構造的な多忙は、どんな形で評価されるのだろうか。

4. 社会的活動

87年より92年まで志摩スペイン村開設に当たり、上野千鶴子氏らとともに諮問委員会（座長・増田義郎氏）の委員をつとめた。また、93年4月より94年3月まで横須賀市民大学のスペイン語講座の講師を担当。94年4月より横須賀市文化振興審議会審議委員。99年4月より02年3月まで横須賀市芸術文化財団理事を経て、02年4月より横須賀市生涯学習財団理事。99年春より00年秋までは、市の新女性行政検討委員会委員として、市の施策への答申作りにならざわった。02年4月より横須賀市水道事業経営委員会委員も務める。

渡邊 愛子

（スペイン語スペイン文学科教授）

1. 研究活動

A) 授業に関連した領域での研究活動 I・スペイン語の動詞

スペイン語における動詞の法、時制、アスペクトは、外国語としてスペイン語を履修する場合、最も困難な分野に属する。法に関しては、現代語において接続法の使用頻度は低下する傾向にあり、不定詞で代用する場合もある。しかし一般的に研究書、学習書には膨大な量の用法と用例が、20世紀初頭には使われなくなったものも含めて、収められている。そのため学習者は現実の言語の運用と用例集に見られる規範との間で混乱を起こすことになる。その救済法として言語コーパスを用いての用例の収集を試みているが、スペイン語のコーパスは品詞標識の付いたものが無いので（また品詞標識をつけるソフトが無いので）この作業は困難を極めている。2年後にはある程度まとまった形で学生に提供できる予定である。

時制とアスペクトの関連に関してもスペイン語は非常に難しい。これもコーパスで用例を収集中であるが、用例を分析した結果、結論が出るかどうかは不明である。

B) 授業に関連した領域での研究活動 II・形態統語の教授法

スペイン語専門科目の内、日本人の教員が担当するのは、講読を除いて、形態統語論である。学生のレベルに合わせてこれをいかに展開していくかは、頭の痛い問題である。本学のカリキュラムに適合するテキストを現在作成中であるが、スペイン語の形態統語を学生に理解させ、運用できるようなレベルにまで持っていくには言語学的メソッドのみでは不可能である。また良く用いられたパターン練習の多用も学生をあきさせるだけである。また現実にスペイン語を使用できる環境も学内以外にはほとんど無いので、ヨーロッパで多数派であるコミュニケーション・メソッドもあまり効果は無い。

現在一番効果的であると考えているのは形態統語の各項目をスペイン語圏の文化（日常生活も含めて）に結合して、学生に興味を持たせるやり方だろうと思われる。一般的に考えられる教授法とは遠い方法ではあるが、現実的ではある。作成中のテキストではこれを試みている。

C) 中世カスティリヤ語の統語・限定辞の用法

限定辞の中でも使用頻度の格段に高い冠詞を中心とする。スペイン語では主語となる普通名詞は一般的に限定辞を必要とする。語順が機能を決定する要素ではない言語においては、限定辞が重要な機能を担う。

ラテン語において不在であった冠詞がロマンス語一般で発生し、中世においてカスティリヤ語が出現すると定着していく。この過程を中世前期(13世紀まで)と後期の比較することを中心に研究を行っている。

現在までに収集した資料の分析では、後期は現代語につながる用法が確立した時期であることが明白である。しかし前期の資料が後期に比して少ないので、この件に関してはまだ検討の余地がある。

中世が終了した後は、近・現代語の冠詞の用法について、特に主語機能と結びついたところで研究を進めたい。

2. 教育活動

A) 1,2 年次専門必修科目カリキュラム作成・補助教材、テスト作成

本年度より必修専門科目のテキストの統一、科目間の連携を密にすることに学科会議で決定。それを実行するために言語担当の4教員(日本人2名、スペイン人2名)でテキストを決定する。本学のカリキュラム、レベルに合致するテキストがまだ無いため、

次善のものを選択。文法、文法演習、作文、会話(講読を除く)、全ての科目で使用できるものとした。そのテキストを科目間で振り分ける(1年次用日本人教員2名、2年次用は1名で行う)。これで一冊のテキストで講読を除く全必修科目を学生は学ぶことができるので経済的負担も減少する。

テキストは全てスペイン語で書かれているので、日本語での説明を付した補助教材を作成する。1年次文法用(木村、渡邊)、2年次文法用(渡邊)。約90~120頁。

2年会話補助教材(渡邊)、約30頁。来年度の1年次生にはこの補助教材は必要でなくなる。学生の理解を助けるためには、残念なことではあるが、不可欠な教材である。

また毎週語彙と動詞の活用の一斉テストを行うため、テスト問題を作成、このテストにより、学生の語彙等が格段に向上。語彙テスト作成(1,2年次とも渡邊)

動詞活用テスト作成(1,2年次とも Almaraz)

B) Placement Test の実施

4年前より専門必修科目をレベル別にクラス分け、グループ分けすることになり、1年次末、2年次末にクラ

ス分けテストを行うこととなった。その為の問題を渡邊が作成。4枝選択性100題。ただし、同一人が毎年作成し続ける事は問題に偏りができる可能性が大であるので、今後はより多くの教員がかかわるべきであると思う。

テストの結果は、現在のところ、科目の成績とも大体のところで一致し、特にレベルの上のグループ、クラスではかなり成果が上がっている。しかし、レベル最下位のグループ(再履修者が多い)ではクラス運営に担当教員は苦勞しているようである。学習意欲の無い学生が大多数を占めるクラスの運営方法は今後の課題である。

C) テキスト作成

講読を除いた1,2年次用テキストを作成することに決定。1年次用を今年度末をめどに作成中である。作成を担当するメンバーは Benavides, Almaraz, 木村、渡邊である。

来年度は学内でプリントし、修正しながら使用する予定。17年度には、CD-Rom を付して出版出来る。

このテキストは、本学の学生が本学のカリキュラムに即して、無理の無い自然なスペイン語を習得できるよう、またスペイン語を学習するための目的意識を持てるような内容にしていく。

3. 管理運営活動

A) 非常勤教員の担当時間割の調整

学務の方針として、15年度よりグループ、クラス分けされた科目はその科目の全てのグループ、クラスを同一時間に置くことになった。その為の固定された時間割を作成、それに沿って昨年度後半は担当するネイティブ・スピーカーの非常勤教員の調整を行った。曜日、時間帯、担当年次、科目の変更等を伴った為非常に困難な作業であった。

B) 教員公募の実施

平成13年度、本学初の教員公募の実施責任者であった。

4. 社会的活動

特記事項なし。

マリア・マヌエラ・アルマラス・ロモ (スペイン語スペイン文学科助教授)

1. 研究活動

2002 年度においては他の教師たちの協力を得て日本人初心者のためのスペイン語テキスト作りに取り組んだ。私は主にダイアログの部分を担当した。

テキスト作りには当たっては次の事柄に留意しなければならないと考える。

生徒のタイプ（大学生なのか、社会人なのか、年齢は、生徒の母語は、レベルは、等々）

1 を念頭に置いての内容吟味。

到達目標の設定。

その目標を達成させるための適切な練習問題の作成。

使用する教授法。

テキストに使うダイアログは、レベル別に教える文法によって不自然になりがちである。例えば、現在形を教えている段階で、まだ習っていない過去形はダイアログには使えない。

自明のように完璧なテキストを作るという事は難しい。しかし、何についても言える事だが、我々教師はできるだけ理想に近いテキスト作りを目指す努力は日々怠ってはならない。例えば、その中で使用する例文についても、日常生活でごく自然に使える表現を使う。従来のような、**This is a pen** 的なものを出来るだけ排したほうがベターだと私は考える。

2. 教育活動

今年は清泉女子大学の助教授として最初の年にあたる。2000 年の 4 月に来日して以来 2003 年の 3 月までの 4 年間は、他大学のスペイン語学科で 1 年生から 4 年生までの会話を特別非常勤講師として担当してきた。

話し言葉において、所謂日常の会話で話すという事と討論などで話すことには言語表現に違いが出てくる。また、相手の質問に答える時でも、その質問する相手が全くの他人であるのか、知人であってもどの程度の関係なのか、会社の上司なのか、部下なのか、兄弟なのか、配偶者なのか、答える内容も答え方も違って来る。

人と会話を交わすとき、自分の話すことだけを考えていては会話は成り立たない。話すテクニックだけで

なく、相手のいうことを聞く、あるときは黙る、ある時は積極的に会話に参加し相手に相づちを打つということも大事になる。私の場合、生徒たちの背景にあるものは日本だという事、つまり、日本人だという事に留意しなければならなかった。

私は上記の事を念頭に入れて授業をしてきた。ただ、自分の満足のいく授業をするのは並大抵なことではない。目的を 100% 達成するのはそう簡単なことではない事は百も承知である。生徒たちが、スペイン語の単語、文法等を練習し、スペイン語を話せるようになる事は当然の事だが、“スペイン人”のように話す、つまりスペインの習慣、文化を学び、それらを理解した上で話し方を学んでもらいたい。これが私の生徒たちに望む事である。

これらの事をふまえた上で、2002 年度では、四年生の授業において、一つの短い戯曲を使いいかにスペイン人のように話し、またいかにスペイン人のように振る舞えるかを寸劇の形にし、生徒自身が演技をしながら授業を進めた。

実際の授業の流れを説明すると、先ず、発音、イントネーション等に気をつけながらの本読み、そして内容の徹底的理解。生徒たちがテキストを完全に頭に入れてから実際に各場面に立ち演技の練習をした。その時、もちろん生徒たちはスペイン人のように話しスペイン人のように動くよう指導した。私の役目は、監督である。

寸劇等を用いて生徒を具体的なシチュエーションにおきその時の実際に即した会話をさせて言葉を覚える事はとても有用だと私は思う。又、生徒達の授業に対する興味も持続する事ができる。

3. 管理運営活動

前年度は、特別非常勤講師として勤務していた関係上、管理、運営には特に携わってはこなかった。

4. 社会的活動

特記事項無し。

木村 琢也

(スペイン語スペイン文学科助教授)

1. 研究活動

主に①スペイン語音声学（特にアクセントとイントネーション）、②日本語とスペイン語の対照研究、の二分野の研究をしているが、特に①を研究の中心にしている。

近年、音声言語のプロソディー（韻律）の研究は急速な発展を遂げているが、その発展は工学的手法の目覚ましい進歩に負うところが大きい。ところが、そうした新しい手法による研究成果が続々と生み出されている英語、日本語、オランダ語、スウェーデン語などと比べて、スペイン語のこの分野の研究は驚くほど遅れている。また、工学系研究者と語学系研究者の相互理解が完全ではないという現状がある。

私はあくまでも語学系の研究者ではあるが工学の研究成果にも常に注目しながら、スペイン語の韻律現象を記述する枠組みを少しずつ組み立てており、その成果を日本イスパニヤ学会機関紙『イスパニカ』（第 36, 41, 42 号）その他の媒体に発表している。

今日、この種の研究は精密な実験観察に基づくものであることが要求される。ソフトウェアの進歩により、高価な器具がなくても実験ができるようになってきたが、実験の実施や結果の解析に時間と手間がかかることに変わりはなく、私一人の手に余る感を強くしていた。そこで平成 14 年度からは同じ分野に興味を持つ若い研究者 4 人とチームを組んで、共同研究を始めている。現在のところ連名で発表した研究業績はないが、研究は進行中であり、平成 15 年 8 月にスペインのバルセロナで開催された国際音声学会議において、私ではないがメンバーのうち 2 人がそれぞれ単著の形で口頭発表をおこなった。

上記②の分野に関しては、従来あまり注目されていなかったが実は日本人のスペイン語学習者にとって難題であるスペイン語の疑問詞の使い分け、特に *cuál* の用法について調べ、いちおうの解決をつけたと自負している。この成果は『イスパニカ』（第 38, 39, 40 号）に発表した。

2. 教育活動

平成 14 年度は文学部スペイン語スペイン文学科の科目として①スペイン語 I・2（文法 2）（1 年次必修科

目）、②スペイン語 II・5（講読 1）（2 年次必修科目）、③スペイン語 II・6（講読 2）（2 年次必修科目）、④スペイン語学講義 I（3, 4 年次選択科目）を、全学共通科目として⑤人間論 II を、大学院言語文化専攻の科目として⑥スペイン語学特殊研究 I を担当した。

スペイン語スペイン文学科では 1 年次必修科目を特に重視している。ほとんどの学生にとってスペイン語は初修外国語であり、しかも大学 4 年間の学習の基盤となるものだからである。中でも私が担当する上記①は 1 年生全員を対象とした初級文法の授業であり、私が責任の重大さを感じて最も多くの精力を傾注している科目である。

学生への文法教育は以前に比べてより困難になっている。その原因は数多く指摘できるが、ここでは言及を控える。重要なことは、以前と同じ教え方が通用しなくなっており、各教員が自分勝手な教え方をせずに互いに連携を図る必要性が高まってきているということである。この認識のもと、平成 14 年度は 1 年次の文法関係科目（3 科目）で共通の教科書を用い、内容を各科目で分担して教えるということ、各科目担当教員の協力を得ておこなった。

平成 15 年度はこの科目間の連携をより本格的なものにすべく前年度から協議を続け、すべての 1 年次必修科目（講読とスペイン文化概論を除く）で共通の教科書とオリジナルの副教材を用い、各回の授業内容の綿密な計画表を作って限りある授業時間の最大限に有効な活用を図っている。この計画表と副教材は、主に本学科の渡邊教授と私の 2 名で作成した。15 年度の前期を終え、すでに 1 年次生の教科内容理解度が例年に比べて高いという実感を得ている。

このような科目間連携を実現するには、非常勤講師を含む全教員の理解と協力が不可欠である。我々は前年度の秋から全教員への説明を始め、春休みにはいる前に次年度前期の授業計画表を配布した。

これとは別に、16 年度以降のために本学の完全オリジナル教材の作成に取りかかったところである。これには本学科の専任教員全員が参加している。

3. 管理運営活動

平成 14 年度は①入試委員、②セクシュアル・ハラスメント防止委員、③ラファエラ・アカデミア運営委員、④人文科学研究所運営委員を務め、すべて平成 15 年度も留任している（②は「ハラスメント防止委員」と改称）。15 年度にはさらに⑤生涯学習委員にも就任した。

①と②については常に難問が山積しているが、特に①に関しては各学科のエゴがぶつかり勝ちである。大局的に大学全体の利益を、しかも長期的な見地から考える必要を痛感する。②に関しては、一部の教職員だけでなく全教職員の意識を高める活動をしなければならないと考えている。

③については、スペイン語関係の科目をより充実させたい。すでに新講座の開設、すぐれた講師の新規担当依頼をしているが、この活動は今後も続ける所存である。また、従来からスペイン語関係の科目名称（「入門」「初級」など）と授業レベルに不一致、混乱が見られたので、これを是正した。

4. 社会的活動

日本イスパニヤ学会の理事および編集委員、日本音声学会の企画委員、東京スペイン語学研究会の編集委員を務めている。

平成 11 年度以降断続的に NHK ラジオスペイン語講座の講師を担当しており、平成 14 年度に関しては 4 月から 9 月まで入門編を担当した。この入門編は 15 年度の 10 月から 3 月に再放送されている。

平成 14 年度と 15 年度には清泉ラファエラ・アカデミアの講座「はじめてのスペイン旅行会話」を担当した。

14 年 6 月と 15 年の 6 月、学科主催の野外イベント「スペイン&ラテンアメリカ 体感、スペイン語文化！」に参加し、本学科の他の教員や学生たちとともにスペイン語の歌を演奏して、好評を博した。これは本学広報活動の一環ではあるが、同時にスペイン語圏文化の片鱗を一般の人に披露する機会にもなったと思う。

長野 太郎

(スペイン語スペイン文学科専任講師)

1. 研究活動

これまで一貫してとりこんできた研究テーマは、20 世紀アルゼンチンの文化的ナショナリズムの問題であ

る。従来、ラテンアメリカにおけるナショナリズムは、政治、経済、芸術上の、一過性の現象としてとりあげられることが多かった。しかし、文化的実践について言えば、国家、民族、伝統など、何らかの同一性を前提とした独自表現の追求は、かたちを変えながら日常のすみずみに根をおろしていると言える。

私の研究では、こうした独自性追求を文化的プロジェクトとしてとらえ、その系譜を描き出すことを目指している。こうしたプロジェクトには、権威を背景に上から実現されるものと、日常的実践の延長として下から生じるものがある。ここには、文化史、思想史、文化人類学、社会学など、学際的視野から取り組むべき問題が数多く含まれるが、大まかに言って、二つの方向性が見えてきている。

一つめは、上からの運動と日常的実践のズレ、およびその相互作用を見ていく批判的作業である。これまでに、①「文学史」、②「民俗学」という二つの制度を対象として、支配的言説の形成とその働きを分析した—①1910 年代にアルゼンチンで展開された土着主義文学論争において、表現手段としての口語性（方言）は国民文学の条件から排除された。その結果、口語を用いた「ガウチョ詩」のジャンルは文学史の資料として過去に位置づけられ、文化的実践の様式面における独自性探求は、文学からパフォーマンス・アーツ（演劇、舞踊、音楽など）に比重が移った。②いっぽう、1940 年代に完成をみた古典的民俗学は、民族誌的手法で独自文化の存在を証明しようとした。民俗学者はアルゼンチン北西部の伝統社会を理想化し、国民文化の規範として「内なる異文化」を描き出した。

二つめの方向性は、権威を与える制度と交渉をしながら具体的プロジェクトを推進する実践者の事例研究である。こちらについては、1921 年、首都ブエノスアイレスにおいて地方の民謡、音楽、ダンスの劇場公演をおこない、伝統音楽・舞踊再興に大きく寄与したアンドレス・チャサレータについて論文をまとめた。この研究では、中央の知識人、芸術家の間に地方文化への期待があったこと、また素材のメディア化が成功の原因であったことなどを明らかにした。伝統文化の国民化、普及の過程について、現在研究を継続している。

2. 教育活動

清泉女子大学においては、主としてスペイン語とラテンアメリカ文化についての科目を担当している。スペイン語については、外国語科目のスペイン語初級（文法）、3、4 年次のスペイン語講読、スペイン語演習な

どを受け持った。スペイン語については、知識・教養としての側面だけでなく、実践的道具として鍛錬し、活用することを心がけている。過去にスペイン語通訳・翻訳者として働く機会をもち、異文化間コミュニケーションにも特別な関心を抱くことから、コミュニケーションを指向した授業作りを心がけている。初歩段階では、スペイン語が持つ音声的特徴やリズムを体得すること、したがって、聞き取りと音読に重点をおいた授業。さらに中級以降では、テレビ番組、新聞、音楽、民話などさまざまな素材を用いた授業を当面の目標においている。さらに、単なる語学学習にとどまらず、批判力や意見発信能力も大切にしている。昨年度「スペイン語演習Ⅱ」でおこなった、インターネットで閲覧可能なスペイン語新聞のブリーフィングは、語学と情報処理、テキスト批判、情報発信を組み合わせた実践的試みである。

ラテンアメリカ文化については、昨年度清泉女子大学の科目「ラテンアメリカ文学演習」において、アルゼンチンの土着主義文学を主題としながら、それにとどまらず広く文化研究の基礎的な方法論についても検討した。また、東京外国語大学において非常勤講師として出講した科目では、ラテンアメリカ都市文化論を主題として、都市ブエノスアイレスにおける文化的実践の複数性を通時的、共時的に検討した。平成15年度は、清泉女子大学においても、「ラテンアメリカ文化概論」「スペイン語圏文化演習」の二科目をもち、さらにラテンアメリカ文化研究についての教育活動に専心する見込みである。

3. 管理運営活動

2002年度は、図書委員および紀要委員をつとめた。図書委員については、所属学科の図書・資料拡充および委員会と学科との連絡が主たる役割であった。新任のため、当然自分の専門領域の基礎文献整備を心がけたが、その際に気づいた点がいくつかある。まず第Ⅰにあげるべき点としては、学生が直接利用する可能性の低いスペイン語専門書が豊富である一方で、当該分野における学問的関心を持つきっかけとなりうるような日本語、英語文献、AV資料の類が手薄であること。さらに、広く社会、文化、歴史をとらえるために必要な枠組みを獲得するための基礎文献も不十分である。そのため、昨年度はラテンアメリカに関する日本語基礎文献の充実を心がけた。今年度も引き続き図書委員をつとめるため、専門領域、一般領域における基礎文献の拡充、AV資料の充実を目指したい。

4. 社会的活動

1992年以来、NHK衛星放送でスペイン国営放送のニュース翻訳に携わっている。この番組が日本国内において定期的にスペイン語圏のニュースを紹介してきた意義は大きい。その他、昨年度は日本自転車振興会における通訳業務、さらに実務文書翻訳、放送通訳についての講座を専門学校で受け持った。また、2001年から2002年まで自宅近所の中学校でペルー人生徒への日本語補習のボランティアをつとめたほか、また、国内で発行されるスペイン語紙に寄稿した。

その他、ライフワークとして取り組んでいるアルゼンチンの舞踊については、デモンストレーション、ワークショップ、イベント企画、雑誌記事執筆などを行うほか、在日ラテンアメリカ・コミュニティとの連携につとめている。昨年度は、とくに在日ラテンアメリカ人児童のグループとともにラテンアメリカと日本の文化交流を目的とした舞踊フェスティバルに参加した。

荒木 成子

(文化史学科教授)

1. 研究活動

私が専門とする初期フランドル絵画の研究の基礎を形作ったのはM.J.フリートレンダーであり、『初期ネーデルランド絵画15巻』(1924-36年)を編んで、16世紀半ばのブリューゲルの時代に至るまでの約150年間に輩出した画家たちの生涯・作品・様式的特徴を明らかにした。1953年にパノフスキーが著した『初期ネーデルランド絵画』はフランドル絵画の図像研究に新たな道を拓く。彼は<隠された象徴主義>という言葉を用いて、この精密な描写による宗教絵画の本質を明らかにしようとした。こうした図像学的解釈は長い間、主流として多くの追従的研究を生むこととなった。パノフスキー批判と彼の学説を乗り越えようとする試みがいわゆるニュー・アート・ヒストリーの方法論を援用しつつ盛んになるのは1980年代以降のことである。

私自身の最近の研究はこうした近年の研究動向を視